

校長先生の初恋物語

第35話 によろひげ君の特大ホームラン

けっきょく、によろひげ君は、4回連続でホームランが出て、全部で5本のホームランバーを食べることができたんです。

「すごい、なんてついてるんだ。もしかして、これが、あの白ひげのじいさんが言ったことだろうか。」

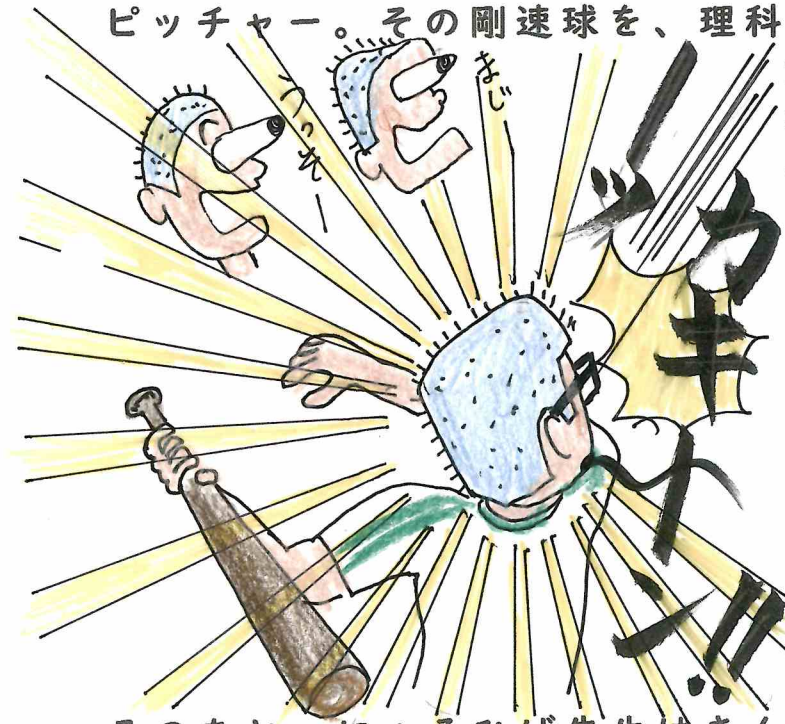
それだけでは終わりません。

体育の授業で、男子は野球をすることになったそうです。でも、によろひげ君はあまり運動がとくいなわけではなく、いつもは、しあいをして、三振ばかり。ホームランどころか、ヒットも打てなかったそうです。しかし、あごひげを伸ばしたら、なんと、ホームランを打つことができたんです。それも、ピッチャーは、野球部の本物のピッチャー。その剛速球を、理科実験部だったによろひげ君が、特大のホームランを打ち、野球部のかんとくから、「理科実験部はやめて、野球部に入らないか。」とさそわれたんだそうです。

そんな話をによろひげ先生がしてくれて、とっくんは「おかしいことを言ってるな。」と思いました。あまり信じていませんでした。しつもんをしたきんに君は、「そんなのうそだよ。」と大笑いしていました。でも、によろひげ先生のまじめな顔はくずれません。

「きんに君。うそじゃないよ。」

そのあと、によろひげ先生はきんに君の近くに行き、きんに君の耳もとで「ごによごによごによ。」と何かを言って、そして席にもどり、何事もなかったかのようにまるつけの続きをしていました。きんに君も、によろひげ先生のひそひそ話の後は、しつこく質問もし



ないで、にやにやしているだけです。「なんだか、きんに君も、によろひげ先生も、あやしいなあ。」

昼休みになりました。みんなは外に遊びに行きました。でも、いつもは真っ先に走ってきんに君が、教室に残っていました。それもあやしいなあ、とっくんは思いました。

教室の中は、まるつけを続けるによろひげ先生と、きんに君と、とっくんの3人だけになりました。きんに君はちらちらとっくんの方を気にしていましたが、口笛をふきながら、によろひげ先生のところに近づいていきました。そして、によろひげ先生とまたひそひそ話をしていました。とっくんは、耳をすませて、2人の会話をいっしょうけんめい聞きました。

「によろひげ先生。やくそくどおり、によろひげをかしてほしだいちょう。」

なんと、によろひげをきんに君は、かしてもらもりです。によろひげ先生は、にやっと笑うと、こう言いました。

「ぜったいになくすんじゃないぞ。ちゃんと返してくれよ。」

そう言う、によろひげを指でつまんで引っ張って、あごから「ピンッ」と、ぬいしまいました。そのぬいたによろひげをセロハンテープで、きんに君のあごにべたっとつけたのです。

「ありがとう、によろひげ先生。1日だけかしてね。明日はちゃんと返すから。」



その日、によろひげ先生のによろひげは、きんに君のあごについていました。きんに君はみんなからしつもんされても、によろひげのことはいっさい口にしません。そのままきんに君は、家に帰っていきました。

その日きんに君は、学校から帰ってすぐに、「ひっこみやさん」というだやし屋さんに行ったそうです。によろひげのふしぎな力をためすつもりです。

このあと、によろひげのすごいパワーを、きんに君は思い知ることになるのです。

次回予告

当たりが止まらない